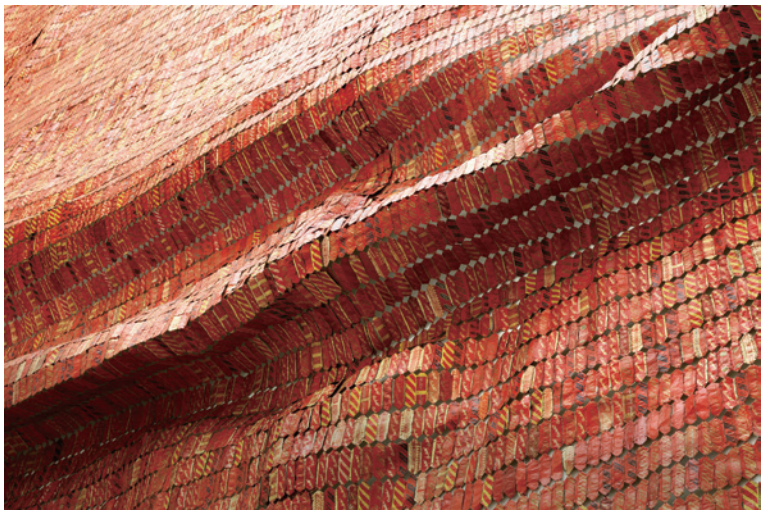
21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

PRESS RELEASE 2024.6.21



Lines（ラインズ）
—意識を流れに合わせる

2024年6月22日（土）～
10月14日（月・祝）

展覧会名	Lines —意識を流れに合わせる
会期	2024年6月22日（土）～10月14日（月・祝）
休場日	月曜日（ただし7月15日、8月12日、9月16日、9月23日、10月14日は開場）、 7月16日、8月13日、9月17日、9月24日
開場時間	10:00～18:00（金・土曜日は20:00まで） ※観覧券販売は閉場の30分前まで
会場	金沢21世紀美術館　展示室7～12、14、交流ゾーン
出品作家数	16組
作品数	35点
料金	一般 1,200円（1,000円）/ 大学生 800円（600円）/ 小中高生 400円（300円）/ 65歳以上の方 1,000円 ※本展観覧券は同時開催中の「コレクション展」との共通です ※（　）内はWEB販売料金と団体料金（20名以上） ※当日窓口販売は閉場の30分前まで
日時指定ウェブチケット購入方法	当館ウェブサイト（https://www.kanazawa21.jp）よりご購入いただけます。
主催	金沢21世紀美術館［公益財団法人金沢芸術創造財団］、独立行政法人日本芸術文化振興会、 文化庁　委託：令和６年度日本博 2.0事業（委託型）
助成	スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団、デーニッシュ・アーツ・ファウンデーション
協賛	能崎物産株式会社
協力	株式会社 山田写真製版所、金沢美術工芸大学
後援	北國新聞社
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL：076-220-2800

JAPAN CULTURAL EXPO 2.0　Statens Kunstfond

本資料に関するお問合せ
金沢21世紀美術館　担当学芸員：黒澤浩美、野中祐美子
広報担当：石川聡子、吉冨智大、落合博晃
〒920-8509　金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814　FAX 076-220-2802
https://www.kanazawa21.jp　E-mail: press@kanazawa21.jp

20th Anniversary

展覧会概要

人間と自然のより調和的でバランスのとれた関係を目指す上で、アートはその特性とするオープンで受容的な考え方や、既存の前提を疑う姿勢、そして今を生きる我々が、意識をどこに向けていくかを再考する重要なプラットホームとなり得る。人間の自然界への積極的な関与もまた、現代的な意識の変化と「世界」の把握に影響を与えるものと考える。展覧会「Lines（ラインズ）—意識を流れに合わせる」では、自然の中に見出す手がかりを、どこまでも追求するアーティストらによってもたらされるもののほとんどが線に沿って進んでいるとするティム・インゴルドの考えを参照して、世界を相互に結びついた生態系のプロセスの網の目として理解し、私たち人間の創造的実践をより広範な文脈の中に統合すること、また、生きるためにさまざまな亀裂を縫い続けて線に沿って歩くことを現在進行中の前向きな「なりゆき」のプロセスと捉える。線の探究に積極的に参加する作家作品を紹介する。

黒澤浩美（チーフ・キュレーター）

展覧会の特徴

世界的に注目を集める
英国の人類学者ティム･インゴルドの思想から着想を得た展覧会

英国の人類学者のティム・インゴルドは、人間と動物、進化という概念、人間にとっての環境など、従来の文化人類学の枠組みを大きく越える思索を続け、哲学、社会学、生態心理学など多様な領域を横断しながら人類学研究を展開する、今日最も注目すべき思想家のひとりとして世界的に注目されています。本展は彼の著作の中でも、はじめての邦訳となる『ラインズ　線の文化史』（左右社、2014年）からインスピレーションを得て構想されました。世の中に存在する全てのものを「線」という視点から考察し、線が私たちの生活や人間関係をどのように形作っているか、作品を通じて考える場とします。

多様な線が面を紡ぎ、世界を形作る場に立ち会う

本展はタイトルの通り「Lines/線」がテーマです。地球上に存在するあらゆるものが紡ぎ出す線をアーティストが見出し、これらの線が彼らの創造的なプロセスによって織り込まれ網の目のような面となり、私たちの身の回りにある新たな世界を形作っていきます。当館の展示室や展示室を越え展開されるこれらの創造的実践から、私たちは世界に積極的に関わり参加する糸口を見出すことが出来る展覧会です。

開館20周年を記念した、
当館のコレクションを含む世界10ヵ国16作家による35作品を展示

金沢21世紀美術館では、開館前の2000年より現在に至るまで約4,200点の現代美術作品を収蔵してきました。本展は当館の開館20周年を記念し、コレクション作品の中から様々な線を見出すことのできる作品をピックアップして展示するほか、日本、ベトナム、オーストラリア、ガーナ、フランス、オランダ、デンマーク、チェコ共和国、アメリカ、ブラジルの10ヵ国から多種多様な文化的背景を持つ16作家（グループを含む）による35作品を紹介します。

出品作家
（姓のアルファベット順）

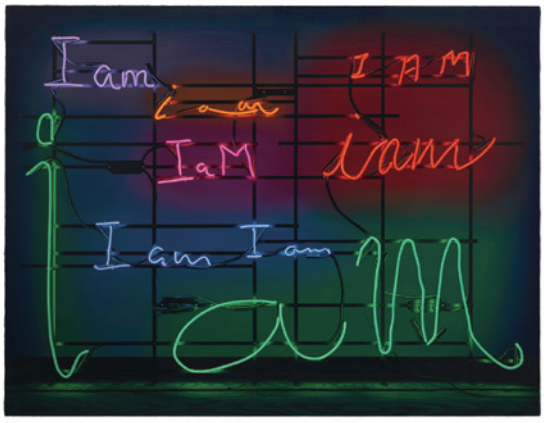
エル・アナツイ、ティファニー・チュン、サム・フォールズ
ミルディッギンガティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ、マルグリット・ユモー
マーク・マンダース、ガブリエラ・マンガーノ&シルヴァーナ・マンガーノ、大巻伸嗣
エンリケ・オリヴェイラ、オクサナ・パサイコ、ユージニア・ラスコプロス
SUPERFLEX、サラ・ジー、ジュディ・ワトソン、八木夕菜、横山奈美

展示作品紹介

展示室７前

横山奈美 / Yokoyama Nami
《Shape of Your Words[In India 2023/ 8.1-8.19]》2024年

実物のネオン管で言葉や消費されていくイメージを制作して、それを忠実に絵画に描く横山奈美。最近作は、インドでの滞在制作を通して、はじめて自分以外の人々が書いた「I am」という文字をコラージュした《Shape of Your Words（言葉のかたち）》だ。目と心に導かれた手の動きによる書き文字は、その瞬間のその人の意図、感情、思考を反映した独特の痕跡を生み出す。書き文字のドローイングをネオン管で立体化した後に平面に戻すというプロセスについて横山は「『私は』の言葉が表す『他の人の身体を忠実に描くこと』」 と言う。手書きの「Lines（線）」は、言葉の意味以上に心と身体と外界を直接結びつけることができる。



1

横山奈美《Shape of Your Words [in India 2023/8.1-8.19]》2024 個人蔵
画像提供：ケンジタキギャラリー　© Nami Yokoyama　photo : ITO Tetuso

展示室7

大巻伸嗣 / Ohmaki Shinji
《Plateau 2024》2024年

日本海は、アジア大陸と日本列島に囲まれた縁海で、対馬海峡からの対馬暖流が流入する。外洋との海水交換が表層に限られた閉鎖性の高い海域で、3つの海盆があり、その中央は大和堆と呼ばれる浅瀬だ。2024年1月1日の地震で被災した能登半島は、この日本海に最も突出した半島である。大巻伸嗣による《Plateau 2024》は、円盤にプリントされた世界を構成する大陸のダイナミックな動きと、その上に据えられた銀色のオブジェが大和堆の上の空と海を、盤上を静かに動く振子には大和堆（やまとたい）の地形が溝に刻まれている。時間と共に変化する陸地と海の関係は、常に「なりつつある」状態にあり、人間社会が共有する時間の軸とは異なる時間を刻む。大巻は実体を固定的で静的なものとして見るのではなく、関係の網の目の中に取り込まれ、環境との相互作用の中で常に変化しているものとして見るべきと本作で示唆して、量塊とそれを取り巻く環境との間がゆらぎながら変化している「動き」を表している。

2

大巻伸嗣《Plateau 2024》2024
「Lines（ラインズ）—意識を流れに合わせる」展示風景、2024年
作家蔵
photo: 大巻伸嗣スタジオ

展示室8

ジュディ・ワトソン / Judy Watson

《記憶の傷跡、フィンガーライムの根、カスアリーナ・イエロンガスタジオで見つけたオブジェ》2020年
《立石、黄土色の網、背骨》2020年
《グレートアーテジアン盆地の泉、湾（泉、水）》2019年
《頭骨漁り》2021年

ジュディ・ワトソンはオーストラリアの先住民であるアボリジニの遺産を参照し、伝統的な先住民の芸術形態や彼らの生活や文化の象徴を現代的な文脈で、モノタイプ*、彫刻、インスタレーション作品を発表している。顔料、黄土色、天然染料などの素材を巧みに使いこなし、ファウンド・オブジェクトやアーカイブ資料を作品に取り入れた作品は、先住民の血を引く自身の身体性、時間と記憶のレイヤーが一体化しており、深みと意義に富んでいる。

*モノタイプ：版に直接インクや油絵具などの描画材を用いて描画し、その上に紙をのせて圧力をかけることにより、版に描画したイメージを紙へと転写する版画技法。

3

4

3. ジュディ・ワトソン《グレートアーテジアン盆地の泉、湾（泉、水）》2019
金沢21世紀美術館蔵　©Judy Watson photo: KIOKU Keizo
4. ジュディ・ワトソン《記憶の傷跡、フィンガーライムの根、カスアリーナ・イエロンガスタジオで見つけたオブジェ》、2020
作家蔵　photo: Rhett Hammerton. Image courtesy of the artist and Milani Gallery, Meanjin / Brisbane.

展示室8

エル・アナツイ / El Anatsui

《パースペクティブス》2015年

アナツイの代表的な作品は、金属ボトルのキャップ、牛乳缶の蓋、アルミの帯など、廃棄された素材から作られた複雑なタペストリーであることが多い。これらの素材を丹念に縫い、織ることで、記念碑的な彫刻へと変貌させている。高さ12メートルに及ぶ本作は、人の手を介して有機的に絡まり合う様子を示し、共有した時間の流れがそのまま織物となって顕現化したものである。持続可能性、臨機応変さ、経済的・環境的課題に直面する地域社会の回復力というテーマを物語っている。消費文化が世界に与える影響や、アフリカの文化的、社会的、政治的背景に対する感受性の反映をダイナミックに表した大作である。

5

エル・アナツイ《パースペクティブス》2015
© El ANATSUI
金沢21世紀美術館蔵
photo: KIOKU Keizo

展示室9-10

マルグリット・ユモー / Marguerite Humeau

《醸造家》《シロアリ菌の守護神》《落葉II》《ハニー・ホルダー》《集団的熱狂》2023年

多様で学際的な芸術活動で知られるフランスの現代アーティスト、マルグリット・ユモーの作品は、しばしば芸術、科学、神話の境界を曖昧にし、生命の起源、古代文明、人間と動物の関係などのテーマを探求している。彼女の彫刻作品は、しばしば人間以外の生き物とその環境との関係を探求し、すべての生き物の相互のつながりに注目させる。昆虫が生態系の中で繁栄するために採用している複雑なシステムとコミュニケーションの方法は、科学的な見聞と、彼女が感じる生き物の本質の両方を捉え、ユモーの彫刻を傑出したものにして生命を吹き込む。音や光、香りの要素もしばしばインスタレーションに取り入れ、彫刻、ドローイング、インスタレーションといった伝統的なメディアと、科学的リサーチや思索的なストーリーテリングを組み合わせて、崩壊しつつある人間社会から、昆虫コミュニティ内の秘密の生活のシミュレーション、そして新たに形成された集団がシンクロする過程にある未来の集まりの予想図を見せる。

6

マルグリット・ユモー《ハニー・ホルダー》2023
© Marguerite Humeau. Photo © White Cube (Eva Herzog)
Courtesy of the artist and White Cube

展示室11前

八木夕菜 / Yagi Yuna

シリーズ「Passes」2024年

「御食国（みけつくに）」は、古来、天皇が食される海産物などの食物を納めた国を示し、万葉集には、伊勢・志摩・淡路などが詠われている。奈良時代の木簡や平安時代の法典「延喜式」からは、若狭が「御贄（みにえ）」を納める国であったことがうかがえ、今日においても「鯖街道」と呼ばれる道筋が、人々の往来を示すLines（線）として地図に標（しるし）が残っている。八木夕菜は、2021年から2年間にわたって料理家・中東篤志と共に若狭ぐじ、よっぱらいサバ、熊川葛、金時人参など、鯖街道沿いの豊かな食材と、自然界の繰り返しに寄り添う季節の移ろいを表す風景を、繊細で透明感のある写真にとらえてきた。街道沿いを実際に歩くように50作品から成る連作は、人々の営みが点で構成されたものでなく、時間と空間をつなぎながら美しい網目となって絶えず変化し、相互に作用し合っていることに気づかされる。

7

八木夕菜《35.52899496960655, 135.80684021577034　2023.5.11》2023 /「Passes」より
作家蔵　©Yagi Yuna

展示室11

ミルディッギンガティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ / Mirdidingkingathi Juwarnda Sally Gabori

《ニンイルキ》2010年
《ディビルディビ・カントリー》2008年
《ディビルディビ・カントリー》2009年

《スウィアーズ島》2008年

Birmuyingathi Maali NETTA LOOGATHA, Mirdidingkingathi Jurwunda SALLY GABORI, Warthadangathi Bijarrba ETHEL THOMAS, Thunduyingathi Bijarrb MAY MOODOONUTHI, Kuruwarriyingathi Bijarrb PAULA PAUL, Wirrngajingathi Bijarrb DAWN NARANATJIL, Rayarriwarrtharrbayingat AMY LOOGATHA

サリー・ガボリは、故郷のクイーンズランド州ベンティンク島をモチーフにした鮮やかな土地や海の風景で知られるオーストラリア先住民のアーティストである。80歳になってから画家としてのキャリアをスタートさせ、伝統的なアボリジニの絵画―点描、線、幾何学的なモチーフーとは全く異なる、大胆な色彩を独自のリズムとパターンで展開するスタイルを築いた。彼女の民族・カイアディルトを中心に、アボリジニの先祖が代々継承してきた土地、海、空を、まるで空を飛ぶ鳥の視点から地上を見おろしたように描いている。躍動感と活力のある作品群は、彼女の個人的な人生と、民族の文化的な物語を力強く表現したもので、自然と民族への共感で溢れている。

8

ミルティンキナティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ《ニンイルキ》2010
個人蔵　© The Estate of Sally Gabori / Copyright Agency Australia

展示室11

マーク・マンダース / Mark Manders

《4つの黄色い縦のコンポジション》2017-2019年
《黄色い縦のコンポジション》2019-2020年
《存在する全ての言葉のコンポジション》2005-2022年
《2色のコンポジション》2005-2020年

マーク・マンダースは1986年より「建物としての自画像」という構想に沿って、インスタレーション、彫刻、紙作品やドローイングなどの作品制作を行なってきた。これらの作品は、架空の建物のメタファーであると見なし、正確な形や大きさが定まっていない別々の「部屋」に分けられ、時間的には始まりも終わりもない。このコンセプトに基づいて、粘土やブロンズ、木といった身近な素材を用いて、実際に使用した素材よりも脆弱に見える彫像を制作。未完成、あるいは壊れてしまったブロンズ製の人物像のほとんどは、人間存在の不確かさと曖昧さに重ねてみれば、私たちの時代における、漠然と人々が持つ不安や見通しの暗さに重ねることもできる。特定できない場所、時間、人物が網の目のように交錯する作品群は、静謐と不穏の混じり合いの中に人々を導いていく。

9

マーク・マンダース《4つの黄色い縦のコンポジション》2017-2019
金沢21世紀美術館蔵
©Mark MANDERS
photo: KIOKU Keizo

展示室12

サム・フォールズ / Sam Falls

《真夜中の虹》《永遠の命》《ペトリコール》《夜の音楽》2023年

サム・フォールズのキャンバスの作品は、太陽の光、雨、風といった自然の要素を利用して、キャンバスの上に植物を配置して何週間にもわたって屋外に置く。このアプローチは、環境と作品との共生関係をもたらし、伝統的な芸術的創造と自然の力との境界線を曖昧にする。この独特のプロセスを通して、無常、儚さ、時の流れといったテーマを探求しているが、彼の作品を考えるうえで、より重要な点は、最終的な作品と同様に芸術表現の一形態として制作行為を重視し、その実践において自発性と即興性を受け入れていることであろう。

10

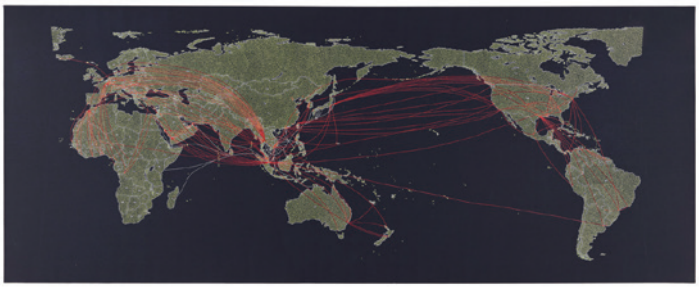
サム・フォールズ《ペトリコール》2023
個人蔵　©Sam Falls

展示室14

ティファニー・チュン / Tiffany Chung

《出国の歴史を再構築する：ベトナムからのボートの軌跡、難民キャンプからの飛行ルートとODPの事例》2020年
《水に記憶があるならば》2022年
《テラ・ルージュ：円形土塁、ゴム農園、廃飛行場が絡み合う風景 》2022年
《テラ・ルージュ円形土塁調査 No.7》2022年

ティファニー・チュン（1969年生まれ、ベトナム／アメリカ）は、都市から大陸まで、また、古代から現代まで、さまざまな地域の歴史、文化、生態、景観考古学に関する詳細なリサーチと内容の分析を通して培われた学際的な活動を元にした作品で世界的に知られている。彼女の作品は、紛争、気候変動、人類の移動に絡む社会政治、経済、環境プロセスの複雑なもつれの追跡を表現したものであり、そのような絡み合いは、紙の作品シリーズ「Terra Rouge」にも現れている。ベトナム南西部にあって、紀元前2300-300年と言われる新石器時代の円形土塁の土壁の痕跡や、19世紀のフランス植民地時代のゴム農園、ベトナム戦争で放棄された飛行場などが描かれたものだ。作品《出国の歴史を再構築する：ベトナムからのボートの軌跡、難民キャンプからの飛行ルートとODPの事例》は、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）や公文書館（UNHCR Archives）から、政府や政府内の通信文書を入手、地図に印を付けて脱出の歴史を再構築。1975年以降のベトナム難民がアフリカ、中東、ラテンアメリカなど世界中に脱出した海路と陸路、そして秩序ある出国プログラムの軌跡を描いている。《水に記憶があるならば》の中で、水には人体の物理的な物質のような堆積物や溶解した物質を含むある種の記憶があることを示唆。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の記録と、タイ湾で海賊がベトナム難民の船を襲撃した場所の座標を基にしたこのビデオインスタレーションは、襲撃され水中で命を落とした人々のための象徴的な海洋葬をテーマに、私たちを歴史的トラウマの現場へといざなう。強制移住の複雑な経験だけでなく、追悼と癒しの行為を通して、私たちの世界の非人間性の下に埋もれた人間性をも思い出させてくれる作品群である。



11

ティファニー・チュン
《出国の歴史を再構築する：ベトナムからのボートの軌跡、難民キャンプからの飛行ルートとODPの事例》
2020
©Tiffany Chung

展示室14周辺

オクサナ・パサイコ / Oksana Pasaiko
《短く悲しい文（二国間の国境に基づく）》2023-2024年

1982年、東欧の歴史的地域であるルテニア生まれとされる以外に、詳細な経歴を辿るのが難しいオクサナ・パサイコの無名性は、完全に意図的に作り出されたもので、創作はアーティストの存在そのものにも及んでいる。2004年の「マニフェスタ5」に参加した際、彼女は展覧会カタログの略歴に「アーティストの希望により、彼女の人生についての詳細は掲載されません」と記載するよう求めた。《短く悲しい文（二国間の国境に基づく）》は、石鹸に人間の髪の毛が1本ずつ固定された作品で、これらは争われる国境を隠喩的に表現している。ルテニアは正式な州ではないが、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ウクライナに挟まれた東ヨーロッパの一地域である。森も山も海も、本来は分離した境界を持つ個体ではないにも関わらず、人為的な国境「線」による分断は、東欧の歴史が数世紀にわたって直面してきた戦争や紛争と深く関わっていることと密接に絡まっている。

12

オクサナ・パサイコ
《短く悲しい文（二国間の国境に基づく）》2023-2024年
作家蔵
©Oksana Pasaiko

展示室14周辺

ユージニア・ラスコプロス / Eugenia Raskopoulos
《作り直すまたは言及する》2010年

ユージニア・ラスコプロスは、写真、ビデオ、インスタレーションなど様々なメディアを使い、印(しるし)やジェスチャーがどのように意味を持ち、個人的あるいは文化的な物語を伝えることができるかを探求している。タイトルの《作り直すまたは言及する》は、既存のマークやシンボルを再解釈または再想像するプロセスを示唆しており、視覚言語を通して意味が構築され、伝達される方法について、彼女の関心を浮き彫りにする。線は、移動、成長、つながりの道筋を表し、糸は人生のさまざまな側面を織り成す糸を象徴している。印をつけることと作ることは、人間が環境と関わる活動の痕跡であり、ひいては個人は日々の生活を通して世界を作る継続的なプロセスに参加している。

13

ユージニア・ラスコプロス《作り直すまたは言及する》2010
©Eugenia Raskopoulos

展示室14周辺

ガブリエラ・マンガーノ&シルヴァーナ・マンガーノ / Gabriella Mangano & Silvana Mangano
《落下の可能性》2009年

ガブリエラとシルヴァーナ・マンガーノは、プライベートで親密なジェスチャーで凝縮された、ビデオ作品において独自の美学を生み出している。《落下の可能性》は、二人の腕が、まるで空間に絵を描くように動きながら、姉妹の手にテープが絡みつき、素早いジェスチャー（身振り／手振り）で優雅なダンスをなぞる。テープは、動きの中で二人の間で交換されながら、常に二人をつないでいる。冒頭はバレエのような優雅さと互いに呼応するような動きで始まり、時間が経つにつれ、より緊張感のあるやりとりになっていく。ジェスチャーは孤立した行為ではなく、文化や歴史、身体化された経験と複雑に結びついているので、社会規範、個人のアイデンティティ、過去の経験と相互に関連していることを認識するきっかけにもなるだろう。

14

ガブリエラ・マンガーノ＆シルヴァーナ・マンガーノ《落下の可能性》2009
ニュー・サウス・ウエールズ・ギャラリー蔵
©Gabriella Mangano & Silvana Mangano

交流ゾーン

SUPERFLEX

ヤコブ・フェンガー、ビヨンスティヤン・クリスチャンセン、ラスムス・ニールセン

《権力のトイレ デス・マスク》2024年
《垂直移行》2021年

《権力のトイレ　デス・マスク》は、トイレ、蛇口、ロール付きトイレットペーパーホルダー、タイル、水洗ボタンといった衛生器具のデス・マスクを鋳造するための鋳型の作品である。型は、それぞれ、国連気候変動枠組条約事務局のトイレという、本部の限られた権力者のみがアクセスできるプライベートな空間を象ったもので、未焼成の粘土で鋳造された彫刻は、この空間の断片的な相似形となる。金沢の土を使って彫刻は複製され、どのような数でも、どのような組み合わせでも展示することができる。トイレという日常的な排泄の場をパブリック・ドメインとして再構築することで、権威的な建築に立ち向かい、オリジナルとコピー、排他性と包括性、ひいては権力のインフラとその日常的な顕在化との関係も問い直す。

制作協力：金沢美術工芸大学　今西 泰赳、小岩井琳太郎

《垂直移行》は人間が生態系システムの中では参加者であるという考え方に基づいた映像作品である。海洋海面上昇のため、今後数世紀のうちに、より高い場所や高層ビルへと垂直に移動することになるだろう。クラゲなど、水中に生息する複数の生物が集まった群体生物の物語は、私たちの物語でもある。生身の人間は漆黒の深海を旅することはできないが、私たちがつながっていること、私たちの行動が互いに影響し合っていること、そして共通の運命を共有していることを認識するために、観察し検討を加えることはできる。作品では、センサーによって、人が近づけば生物が遠のき、人が謙虚に距離を保てば、やがて生物はゆっくりと画面を横断していく。

15

SUPERFLEX《権力のトイレ デス・マスク》2024
ICA North（サンディエゴ）での展示風景
作家蔵
©SUPERFLEX

本多通り口

エンリケ・オリヴェイラ / Henrique Oliveira

《死の海》2024年

エンリケ・オリヴェイラは、しばしば廃棄された家具や建設現場などの都市環境から作品材料とする木材を調達し、彫刻やダイナミックなインスタレーションに変えて、新たな命を吹き込んでいる。自然を開拓した人工的な空間に、自然樹木の加工材を持ち込んだ近代化がもたらした結末に対して、オリヴェイラによる廃材の使用は、消費、廃棄物、人間と環境の関係についての考察など、何層もの意味を持たせている。曲がりくねった有機的なフォルムは、まるで今でも成長し、部分的に空間を支配して、自然界の境界線を曖昧にする。美術館の内外が人の往来によって可視化されている建物の入口（出口）に門のようなフォルムの新作を発表する。

16

［参考画像］エンリケ・オリヴェイラ《Corupira》2023
©Henrique Oliveira
Galeria Millan (São Paulo)
Galerie G.P.&N. Vallois (Paris and New York)

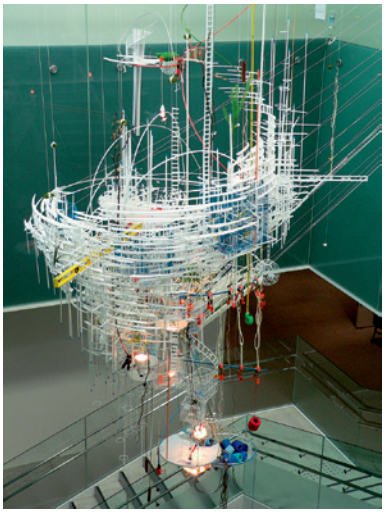
階段

サラ・ジー / Sarah Sze

《喪失の美学》2004年

サラ・ジーの作品の多くは紙、金属、木、プラスチック、ボトルや椅子、電球のような拾い物など、日常生活に使われるありふれたモノを素材に組み合わせ、繊細で精緻なインスタレーションである。《喪失の美学》は、オブジェクトが組み立てられたり分解されたりする過程にあるような、絶え間ない流動的な状態を示唆し、彼女が探究する「混沌と秩序」という関心事や、物体をどのように配置・構成すれば、複雑さとバランスの感覚を同時に生み出すことができるかという二面性を見事に反映している。複雑な構造を辿って混沌と秩序の間の緊張と戯れながら、私たちが身の回りの世界をどのように線に沿って知覚し、ナビゲートする作品である。

17



サラ・ジー《喪失の美学》2004
金沢21世紀美術館蔵
© Sarah SZE

作家プロフィール

横山奈美

photo: Gunji Takumi

1986年岐阜県生まれ、愛知県瀬戸市在住。
捨てられる寸前の物を描く「最初の物体」シリーズや、ネオンをモチーフに、背後の配線やフレームまで克明に描く「ネオン」シリーズなど、物や言葉が持つ価値観を問いつつ、個々の存在に同等の眼差しを注ぐ。最近の主な個展に「遠くの誰かを思い出す」（ケンジタキギャラリー、2024年）、「アペルト10 横山奈美 LOVEと私のメモリーズ」（金沢21世紀美術館、2019年）、グループ展に「Before/After」（広島市現代美術館、2023年）、「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！」（森美術館、2022年）などがある。

大巻伸嗣

Pic by paul barbera / where they create

「存在」とは何かをテーマに制作活動を展開する。環境や他者といった外界と、記憶や意識などの内界、その境界である身体の関係性を探り、三者の間で揺れ動く、曖昧で捉えどころのない「存在」に迫るための身体的時空間の創出を試みる。近年の主な展覧会に、「Interface of Being 真空のゆらぎ」（国立新美術館, 2023）、「地平線のゆくえ」（弘前レンガ倉庫美術館, 2023）、「The Depth of Light」（A4 美術館/成都, 2023）、「存在のざわめき」（関渡美術館/台北,2020）など。「Rain」（愛知県芸術劇場, 2023）、横浜ダンスコレクション2019「Futuristic Space」（横浜赤レンガ倉庫）などパフォーマンス作品も展開。東京ガーデンプレイス紀尾井町、Ijlst（オランダ）、Morpheus hotel at City of Dreams（マカオ）などパブリックアートも多く手がけている。

ジュディ・ワトソン

Judy Watson, 2022.
Photo by Rhett Hammerton.
Image courtesy of the artist and Milani Gallery, Meanjin / Brisbane.

1959年、クイーンズランド州マンドゥベラ生まれのワトソンは、クイーンズランド州北西部のワニ族の末裔にあたります。先祖由来の経験、および個人的経験は、絵画、版画、ビデオ、彫刻、インスタレーションなどさまざまなメディウムにわたる彼女の芸術的実践において、大きな影響となっています。
ワトソンはしばしば、植民地主義の複雑な歴史と、その先住民族コミュニティへの影響を取り上げます。彼女は移住、生存、回復のテーマを探求し、これらの問題に対する認識と理解をもたらそうとします。そうした作品はストーリーテリングの力強い手段であり、文化保護の一形態でもあると言えます。
1980年代から精力的に作品を発表してきたワトソンは、1997年のヴェネツィア・ビエンナーレへオーストラリア館の共同代表作家のひとりとして参加し、2006年には第23回全国アボリジニ・トレス海峡諸島民芸術賞で、「Works on Paper賞」を受賞。また同じく2006年には、ビクトリア国立美術館の「クレメンジャー現代美術賞」を受賞しています。2011年、ワトソンの個展『waterline』がワシントンD.C.にあるオーストラリア大使館で開催され、2012年にはシドニー・ビエンナーレに出展。2018年には、ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館で『the edge of memory』と題された大規模個展が開催されました。ワトソンはこれまでにオーストラリア全土でパブリック・アート・プロジェクトのコミッション作品も制作しており、2007年にキャンベラのリコンシリエーション・プレイスへ設置された《fire and water》、2016年にシドニーのジョージ・ストリート200番地に設置された《ngarunga nangama: calm water dream》、そして同年ブリスベンのクイーンズランド州立美術館 | 近代美術館の10周年記念として設置された《tow row》などがあります。そして2024年には、ワトソンの活動の重要な大規模個展となる『mudunama kundana wandaraba jarribirri』がクイーンズランド州立美術館 | 近代美術館で開催されました。彼女の作品はオーストラリアのすべての州立美術館、オーストラリア国立美術館、東京工科大学、台北市立美術館、大英博物館、シドニー現代美術館とテートの共同収集プログラム等、オーストラリア国内外の重要なコレクションに収蔵されています。ワトソンはグリフィス大学の非常勤教授であり、2018年にはクイーンズランド大学から美術史の名誉博士号を授与されています。

エル・アナツイ

エル・アナツイはガーナ出身の彫刻家であり、その業績豊かなキャリアの大半をナイジェリアでの生活と制作に費やしてきました。アナツイは現在、ナイジェリアのンスカとエヌグ、ガーナのテマにスタジオを構え、世界でも最も優れた、人々の琴線に触れる作品を輩出しています。彼はアフリカ史上最も高く評価されているアーティストの一人であり、世界でも有数の現代アーティストと言えます。アナツイは、酒瓶のキャップ、キャッサバ芋のすりつぶし機、新聞の印刷版など一般的には廃棄されてしまう資源を用い、カテゴリーにとらわれない彫刻を制作します。これら素材の使用は、再利用や変容への関心、そして場所という制約を超越すると同時に自身の大陸と繋がりたいという本質的な欲求を反映しています。彼の作品は植民地主義の歴史を問い、消費、廃棄物、環境のつながりを描く一方で、その中核にあるのは彼の実践を際立たせる独自の造形言語です。アナツイは、地元のアルコール・リサイクル・ステーションから調達したアルミのボトルキャップを何千個も折りたたんでくしゃくしゃにし、銅線で束ねた大規模な彫刻で知られます。巨大なスケールになることもあるこれらの複雑な作品は、光り輝き、重厚感を持ち、丹念に作られながらもしなやかです。彼はインスタレーションを開いたものにし、設置するたびに作品が新しい形をとることを促します。

主な受賞歴に「世界で最も影響力がある100人」タイム誌（アメリカ、2023年）、スコウヒガン彫刻メダル、スコウヒガン・スクール・オブ・ペインティング・アンド・スカルプチャー（アメリカ、メイン州、2020年）、高松宮殿下記念世界文化賞 彫刻部門、日本美術協会（東京、2017年）、ロレンツォ・イル・マニーフィコ生涯功労賞、第11回フィレンツェ・ビエンナーレ（イタリア、フィレンツェ、2017年）、ブランディワイン・ワークショップ・アンド・アーカイブス生涯功労賞、ブランディワイン・ワークショップ（アメリカ、ペンシルベニア州フィラデルフィア、2017年）、リーズ・ビジョナリー賞、AMREFヘルス・アフリカ・アートボール（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2017年）、名誉芸術博士、第365回入学式、ハーバード大学（アメリカ、マサチューセッツ州ケンブリッジ、2016年）、名誉美術博士（DFA）、2016年卒業式、ケープタウン大学（UCT）（南アフリカ共和国、2016年）、栄誉金獅子賞、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア、ヴェネツィア、2015年）、名誉会員、アメリカ芸術科学アカデミー（アメリカ、マサチューセッツ州ケンブリッジ、2014年）、名誉会員、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（イギリス、ロンドン、2014年）、「ニューヨークで開催された個展部門 第二位」（ブルックリン美術館開催『Gravity and Grace: Works by El Anatsui』に対して）、国際美術評論家連盟米国支部（アメリカ、2014年）、第245回夏期展覧会 チャールズ・ウォラストン賞、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（イギリス、ロンドン、2013年）、30周年記念賞、スミソニアン国立アフリカ美術館（アメリカ、ワシントンD.C.、2009年）、プリンス・クラウス賞、プリンス・クラウス文化開発基金（ナイジェリア、ラゴス、2009年）、ビジョナリーズ賞、ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2008年）、大阪トリエンナーレ：第9回国際現代造形コンクール銅賞（大阪、1998年）、関西テレビ放送賞、大阪トリエンナーレ：第3回国際現代造形コンクール（大阪、1995年）、入選、第44回ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア、ヴェネツィア、1990年）

マルグリット・ユモー

マルグリット・ユモー（1986年フランス、ショレ生まれ）は、ロンドンを拠点に活動を行っています。2011年、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで修士号を取得。これまでに、ラファイエット・アンティシパシオン（フランス、パリ、2021年）、クンストフェライン・ハンブルク（ドイツ、ハンブルク、2019年）、ムゼイオン近現代美術館（イタリア、ボルツァーノ、2019年）、ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート（アメリカ、ニューヨーク、2018年）、テート・ブリテン（イギリス、ロンドン、2017年）、ハウス・コンストルクティヴ美術館（スイス、チューリッヒ、2017年）、シンケル・パヴィリオン（ドイツ、ベルリン、2017年）、ノッティンガム・コンテンポラリー（イギリス、ノッティンガム、2016年）、パレ・ド・トーキョー（フランス、パリ、2016年）で個展を開催。ユモーの作品は、クンストハレ（スイス、バーゼル、2021年）、インスタンブール・ビエンナーレ（2019年）、ポンピドゥー・センター（フランス、パリ、2019年）、パリ市立近代美術館（フランス、パリ、2019年）、ハイライン（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2017年）、ヴェルサイユ宮殿（フランス、2017年）、クンストハル・シャルロッテンブルク（デンマーク、コペンハーゲン、2017年）、レ・ザバトワール現代美術館（フランス、トゥールーズ、2017年）、サーペンタイン・ギャラリー（イギリス、ロンドン、2014年）、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 彫刻ギャラリー（イギリス、ロンドン、2014年）等の、数多くのグループ展で紹介されています。

2023年、ユモーはコロラド州フーパーに、160エーカーの大きさを持つアースワーク《Orisons》を制作し、女性のソロ・アーティストによる史上最大級の作品の一つとなりました。この作品はデンバーに本部を置くブラック・キューブ・ノマディック・アート・ミュージアムがキュレーションを手がけ、実現されたものです。ユモーは、ホワイト・キューブ、およびCLEARING New York/Los Angelesに所属しています。

八木夕菜

yunayagi2022
©Tomoko Hayashi

1980年生まれ。京都拠点。パーソンズ美術大学建築学部卒業。写真を軸に「見る」という行為の体験を通して多視点観点から意識の変容を促す作品制作を行っている。代表的な個展に、種が持つ生命の営みの儚さや豊かさを紡ぐ「種覚ゆ/The Record of Seeds」(KYOTOGRAPHIE京都国際写真祭, 2021)、「NOW/HERE」(Pola Museum Annex, 2018)、「視/覚の偏/遍在」(√K Contemporary, 2022) など。主な作品に、写真を立体に立ち上げた《KENCHIKU》(2015)、写真にアルゴリズムを施した《崩れゆく世界》(2016)、日本人の死生観を考察した《祈りの空間》(2017)、「空」の概念を表した《BLANC/BLACK》(2019)、写真における静物画《Superposition》(2024) など。主な受賞に「京都国際写真祭」ポートフォリオレビュー最優秀 (2016) ,「第35回写真の町東川賞」新人作家賞ノミネート (2019)。金沢21世紀美術館収蔵。

ミルディンギンガティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ

ミルディンキナティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ (1924年頃–2015年) は、カイアディルトの名高い長老の女性、そして現代アーティストであり、その短いながらも優れたキャリアは、目ざましい文化的レガシーを残しました。
サリー・ガボリは2005年、80歳頃から絵を描き始め、彼女の特徴である表現力豊かな筆致と鮮やかな色使いで、夫の出身地あるディルディビ、父の出身地トゥンディ、自身の出身地であるミルディディンキ、そしてベンティンク島で最初の移住地であるニンイルキなど、故郷のカーペンタリア湾に浮かぶベンティンク島で、彼女にとって個人的に深い意味を持つ場所を鮮やかに描き出しました。
2015年にガボリが他界した後、ブリスベンのクイーンズランド州立美術館 | 近代美術館と、そしてメルボルンのビクトリア国立美術館で大規模な回顧展が開催され、彼女が残した偉大なレガシーと膨大な作品が称えられました。近年では、2022年にフランス・パリのカルティエ現代美術財団で、2023年にはイタリアのミラノ・トリエンナーレで、国際的な大規模個展と出版が行われました。ガボリは、オーストラリアで最も影響力のある重要な現代アーティストの一人として認知され続けています。

マーク・マンダース

1968年フォルケル (オランダ) 生まれ、ロンセ (ベルギー) 在住。1992年アーネム市芸術大学 (オランダ) デザイン学科卒業。1986年に自ら作り出した「建物としての自画像」というコンセプトに基づき、ドローイング、彫刻、インスタレーションの方式で様々な音、色、リズム、韻、解釈を取り入れた作品を発表してきた。ブロンズ彫刻の伝統に則ったマンダースの彫刻作品は、物理的には堅牢な「モノ」である一方で、故意に作られた亀裂や未完部分が視覚的に脆さや危うさを生み出している。現実と虚構、過去と現在、表現と抽象の境界を曖昧にする、豊かで複雑な視覚言語を創造する。
主な展覧会として、「マーク・マンダースの不在」東京都現代美術館 (2021年、東京)、「ミヒャエル・ボレマンス　マーク・マンダース | ダブル・サイレンス」金沢 21 世紀美術館 (2020年、石川)、「マーク・マンダースの不在」ボンネファンテン美術館 (2020年、マーストリヒト、オランダ)、「あいちトリエンナーレ2016 虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」愛知県美術館 (2016年、愛知)、「不完全な文章のある部屋 第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ」オランダ館 (2013年、ヴェネツィア、イタリア)、「ドクメンタ11」(2002年、カッセル、ドイツ)、「テリトリー：オランダの現代美術」東京オペラシティアートギャラリー (2000年、東京)、「周辺の自画像 第24回サンパウロ・ビエンナーレ」(1998年、サンパウロ、ブラジル) など。
また、《傾いた頭部》パブリック・アート・ファウンド、ドリス・C・フリードマン・プラザ・ニューヨーク (2019年、ニューヨーク、アメリカ)、《ローキン噴水彫刻》ローキン・スクエア (2017年、アムステルダム、オランダ) で大規模な屋外彫刻を手掛けている。

サム・フォールズ

サム・フォールズ（1984年生まれ）は現在、ロサンゼルスとニューヨークを拠点に活動しています。2007年にリード・カレッジで学士号を得た後、2010年にICPバード芸術研究課程を修了しました。フォールズは、時間、表象、露光といった写真の基本的な概念を密接に扱いながら、さまざまな芸術のメディウム同士のギャップや、アーティストと、オブジェクト、そして鑑賞者の間の隔たりを埋めるような作品を制作します。自然やその元素との共生をはかるフォールズの作品は、制作場所のユニークな環境を指標とした場所の感覚が刻み込まれている一方で、普遍的な死生観も帯びています。フォールズは美術史への畏敬の念を持つのと同時に、モダン・ダンスやミニマル絵画からコンセプチュアルな写真やランドアートまで、芸術のジャンルや実践の境界線を共感を取り入れながら曖昧にし、芸術が取り組むべき自然や生命のはかなさの根源的な部分へと集約させます。
主な個展として、ハマー美術館（アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス、2018年）、トレント・ロヴェレート近現代美術館（イタリア、ロヴェレート、2018年）、ザ・キッチン（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2015年）、ボールルーム・マーファ（アメリカ、テキサス州マーファ、2015年）、ポモナ・カレッジ美術館（アメリカ、カリフォルニア州クレアモント、2014年）、パブリック・アート・ファンド（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2014年）、LAXART（アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス、2013年）など。グループ展としては、アスペン美術館（アメリカ、コロラド州アスペン、2018年）、ル・コンソーティウム（フランス、ディジョン、2017年）、コロンバス美術館（アメリカ、オハイオ州、2017年）、ウォーリック大学 ウォーリックアーツセンター ミードギャラリー（イギリス、ウォーリック、2016年）、フルーツマーケット・ギャラリー（スコットランド、エジンバラ、2015年）、ハマー美術館（アメリカ、ロサンゼルス、2015年）、メニル・コレクション（アメリカ、テキサス州ヒューストン、2015年）、ドンナレジーナ現代美術館（イタリア、ナポリ、2014年）、インターナショナル・センター・オブ・フォトグラフィー（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2013年）等に出展しています。

ティファニー・チュン

ティファニー・チュンは、都市から大陸、古代から近現代まで、さまざまな土地の歴史、文化、地形に関する厳密なリサーチと定性分析を通じて培われた領域横断的な実践で世界的に注目されています。彼女の研究成果は、しばしば地図、絵画、写真、彫刻、映像、楽曲の作品として具現化されます。チュンの芸術的実践は、彼女の知的探究心を反映したものであり、景観考古学や歴史生態学に絡む社会政治、経済、環境プロセスの複雑で隠されたもつれの痕跡を発掘します。チュンは空間的な変容、地球の生態系、地質学的記録、気候変動、国際的な貿易ルート、民族の移動などを描き出し、現代における重要な出来事を解きほぐします。地図やアーカイブの権威に挑戦する彼女の作品は、公式記録や歴史的記録の空白を文化的記憶によって復元し、埋めていくのです。チュンの実践は、自然環境と建築環境における私たちの物質文化の足跡を探究し、マクロ・エコシステムとの持続可能な関係を先見的に教えてくれます。
チュンの個展「Rise Into the Atmosphere」は、現在ダラス美術館にて開催されています。2023年には、ナショナル・モール（ワシントンD.C.）で開催された大規模なパブリック・アート展『Beyond Granite: Pulling Together』のプロトタイプ・モニュメントをコミッション作品として制作。『Tiffany Chung: Vietnam, Past Is Prologue』スミソニアン・アメリカ美術館（アメリカ、ワシントンD.C.）、ヨハン・ヤコブ美術館（スイス、チューリッヒ）、Center for Arts on Migration Politics and Staten Museum for Kunst（デンマーク、コペンハーゲン）など、世界各地の美術館で個展を開催。彼女の作品は、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ、クエンカ・ビエンナーレ（エクアドル）、ニューヨーク近代美術館、大英博物館（イギリス、ロンドン）、シルンクンストハレ（ドイツ、フランクフルト）、ノーベル平和センター（ノルウェー、オスロ）、ルイジアナ美術館（フムレベック）、M+（香港）などの国際展やビエンナーレで紹介されています。チュンはイェール大学RITMでメロン・フェロー（2021）のほか、ニュースクール大学ヴェラ・リスト芸術・政治学センターで芸術と社会正義に関するジェーン・ロンバード・フェロー（2018–2020年）を務めました。またこれまでに、アジア・アーツ・ゲーム・チェンジャー賞（2020年）、アジアン・カルチュラル・カウンシル・グラント（2015年）、シャルジャ・ビエンナーレ・アーティスト賞（2013年）を受賞しています。2025年8月まで個展「Rise Into the Atmosphere」（ダラス美術館、米国）開催中。

オクサナ・パサイコ

オクサナ・パサイコは、意図的な匿名性に包まれた作家です。2004年にサン・セバスチャンで開催された『マニフェスタ5』に参加した際、彼女は展覧会カタログの略歴に「アーティストの希望により、彼女の人生についての詳細は公開されません」と記載するよう求めました。しかし同時にこの展覧会のウェブサイトには、パサイコが1982年にルテニア、つまり正式な国家ではなくポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ウクライナに挟まれた東ヨーロッパの歴史的地域に生まれた、と記されています。よってパサイコというアーティストは、国籍よりも民族的な出自を重視していると言えるでしょう。2006年にルーマニアの若手アーティスト向けのビエンナーレへ参加した際には、彼女はオスロ、アムステルダム、そしてベルギーのロンセを「拠点にしている」と記されました。またその極端に寡黙な経歴と同様、彼女は滅多に作品の展示を行わず、それは、自身を守る彼女の決意の現れでもあります。パサイコは『マニフェスタ5』のために、オランダ人アーティスト、バス・ヤン・アーデルによる《Please don't leave me》(1969年) という文字をキリル語で書き直しました。またこの展覧会に合わせ、ローマ・パブリケーションズがパサイコによる30枚の足の写真を収めた小冊子『30 Feet』を出版しています。ローマ・パブリケーションズは、1998年にグラフィックデザイナーのロジャー・ウィレムス、およびアーティストのマーク・マンダースとマルク・ナグザームによって設立されたアムステルダムの美術系出版社で、パサイコの作品の大多数と関連を持ってきました。

2005年、ローマ・パブリケーションズはパサイコによる『Short Sad Text (based on the borders of 14 countries)』と題されたエディションを発行しました。これは、7本の黒い人毛が埋め込まれた2つの石鹸から成り、7つの人工的な領土の境界線の模様をなぞるものです。パサイコはオスロにある公衆トイレにその1つ目のエディションを、ゲント現代美術館 (ベルギー、ゲント) に2つ目のエディションを寄贈しています。加えて同出版社は、「この作品は持ち帰り可能なカードとしても存在する」と発表しました。この石鹸とポストカードはこれまでに、芸術の非永続性やはかなさをテーマとする複数のグループ展へ出展されてきました。さらにパサイコの作品には、既存の作品の土産品ともいえるポストカードも存在します。それは自身の作品のポストカードに限らず、ピート・モンドリアンやジョルジョ・デ・キリコなど、他のアーティストの作品をウィットに富んだかたちで見せるカードにも見られます。また2011年にベルリンなどで開催されたグループ展『The Joy of Pleasure』(2011–2012年) では、色を塗られたカーテンのような作品《The Folds》(2011年) を展示しました。《Short Sad Text》の初出から20年あまりが経った2024年、パサイコは詩集の形式で構想された10点の作品から成る出版物と共に、この作品に立ち返ります。再びローマ・パブリケーションズにより出版される本書は、Keijibanと共にデザインを行なった日本特別バージョンをフィーチャーしたものとなりました。

ユージニア・ラスコプロス

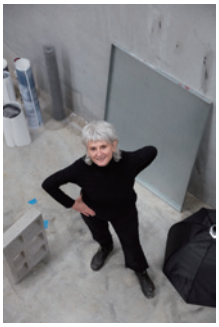


photo: Zan Wimbereley

ラスコプロスの作品におけるコンセプトの幅は、フェミニズムとパフォーマンスを重要な文脈として、アイデンティティ・ポリティクス、身体、ジェンダー、セクシュアリティと差異、言語、翻訳といった関心を含みます。これらのつながりは作品の内外に織り込まれ、彼女にとって政治を用いることと詩学を用いることは等しく重要であると言えます。ラスコプロスは自身が移民かつバイリンガルとして育った経験から、翻訳に焦点を当て、言語が崩壊する地点に関心を寄せます。彼女にとって政治的であることは、世界について知り、その中で社会的な活動を行うことを意味します。アーティストとしての彼女の旅路は「他者」の問題を探求し続けるものであり、最終的な結論を求めるものではありません。そうした作品は、写真とビデオの境界を探求し、パフォーマンス、転写、ネオン、インスタレーションを総合した領域横断的と言えるでしょう。

主な展覧会歴に、「(SC)OOT(ER)ING around, Su san Cohn and Eugenia Raskopoulos」タラワラ美術館 (オーストラリア、ヴィクトリア州、2024年)、モノグラフ『Eugenia Raskopoulos: Vestiges of the Tongue』(Power Publications and Formist、2019年)、「Know My Name」オーストラリア国立美術館 (オーストラリア、キャンベラ、2021年)、「Shadow Catchers」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館 (オーストラリア、シドニー、2020年)、「The National」Carriageworks (オーストラリア、シドニー、2019年)、「Endless Circulation」タラワラ・ビエンナーレ、タラワラ美術館 (2016年)、「Footnotes」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館 (2012年)、「Image Anxiety」フォト・エスパーニャ (マドリッド、2012年)。

ガブリエラ・マンガーノ&シルヴァーナ・マンガーノ

ガブリエラ・マンガーノとシルヴァーナ・マンガーノによる協働的な実践は、パフォーマンス、ビデオ、彫刻、インスタレーションを取り入れた多面的な探求です。日常生活からインスピレーションを受け、しばしば日用品を使ったパフォーマンスを行う彼らの作品は、対人関係における複雑さ、時間の認識、記憶の本質、人と人との繋がりの複雑さを追求します。その革新的な制作へのアプローチは、ジェスチャーや振り付け、繰り返しを通した言葉にならないコミュニケーション方法に重点を置き、現実と虚構の境界を曖昧にするものです。ビデオ作品では、オーディエンスを想像と現実が魅惑的に絡み合う領域へと誘うことで、私たちを取り巻く世界をめぐる理解や、人と人とのつながりの複雑さを再考するよう促します。ガブリエラ・マンガーノとシルヴァーナ・マンガーノは、オーストラリア ヴィクトリア州を拠点に活動しています。
主な（グループ）展覧会歴に、「Single Channel」オーストラリア国立美術館（オーストラリア、キャンベラ、2024年）、「The Double: Identity and Difference in Art Since 1900」ナショナル・ギャラリー・オブ・アート（アメリカ、ワシントンD.C.、2022年）、「未完の庭、満ちる動き」国際芸術センター青森（日本、青森、2018年）、「第9回恵比寿映像祭 マルチプルな未来」東京都写真美術館（日本、東京、2017年）「Reenacting History」国立現代美術館（大韓民国、ソウル、2017年）、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（APT8）」クイーンズランド州立美術館 | 近代美術館（オーストラリア、ブリスベン、2015-2016年）

SUPERFLEX

photo: Daniel Stjerne

SUPERFLEXは、1993年にヤコブ・フィンガー、ビヨンスティヤン・クリスチャンセン、ラスムス・ニールセンによって設立されました。拡張的なコレクティブとして構想されたSUPERFLEXは、庭師からエンジニア、オーディエンスに至るまで、一貫してさまざまな協力者と活動してきました。社会的・経済的組織の創造におけるオルタナティブ・モデルに取り組み、これまでの作品は、エネルギー・システム、飲料、彫刻、コピー、絵画、植物種苗場、契約、公共スペースなどのかたちを取ってきました。展示空間という物理的な場所の内外で活動するSUPERFLEXは、受賞歴もある《Superkilen》が　2011年にオープンして以来、大規模な公共スペースのプロジェクトに携わってきました。これらのプロジェクトは、地域コミュニティや専門家、子どもたちの意見を取り入れた参加型のものが多くなっています。またコラボレーションという考えを更に拡張し、近年の作品では他の生物種の参加を募っています。SUPERFLEXは動物の視点を取り入れた新しい都市論を展開し、社会における異種間の共生を目指します。

サラ・ジー

1969年ボストン（米国）生まれ、ニューヨーク在住。1997年にスクール・オブ・ヴィジュアル・アーツを卒業以降、作品が置かれる空間を強く意識した制作を行っている。綿棒、爪楊枝、ティッシュ、毛糸、プラスチック容器、メジャー、クリップや梯子等、大量生産された没個性的で安価なモノを用いて集積、配列したインスタレーションは、整然としながら混沌とし、絶妙なバランスと緊張感ある世界を生む。加えて、作品に組み込まれた扇風機の動力で起こる風や電気スタンドのランプが灯す光の様相は、あたかも作品がエネルギーを持ち、空間に侵略し、自発的に増幅する生命体のようである。サラ・ジーはありふれた日用品に息を吹き込み、新たな物語を見出そうとしている。
主な展覧会として、「サラ・ジー」ソロモン・R・グッゲンハイム美術館（2023年、ニューヨーク、アメリカ）、「ナイト・イントゥ・ディ」カルティエ現代美術財団（2020年、パリ、フランス）、「サラ・ジー：トリプル・ポイント　第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ」アメリカ館（2013年、ヴェネツィア、イタリア）、「東京アートミーティング トランスフォーメーション」東京都現代美術館（2010年、東京）、「サラ・ジー」銀座メゾン エルメス フォーラム（2008年、東京）、「サラ・ジー」シカゴ現代美術館（1999年、アメリカ）、「ベルリン／ベルリン ベルリン・ビエンナーレ」芸術アカデミー（1998年、ドイツ）など。
彼女の作品は、テート美術館（イギリス）、M+ミュージアム（香港）、MUDAM（ルクセンブルク）、ニューヨーク近代美術館、シカゴ現代美術館、グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、ホイットニー美術館（ニューヨーク）、ロサンゼルス現代美術館、金沢21世紀美術館など、著名な施設のパーマネント・コレクションに収蔵されている。

エンリケ・オリヴェイラ

photo: Julian Marshall

エンリケ・オリヴェイラは1973年、ブラジル オウリーニョス生まれ。1990年にサンパウロへ移り住み、サンパウロ大学（USP）で視覚芸術の修士号を取得。
オリベイラの没入型の環境やハイブリッドな空間は、彫刻、絵画、建築といった領域を行き来しながら素材本来の性質を呼び戻し、その常識的な使い方を再定義します。またそうした作品には、様々な引用が見てとれます。SFや医学書から美術史や精神分析にまでわたる主題は、生有機的なイメージと都市の物質性を融合させた独自の視覚言語へと向かいます。彼の作品はしばしば空間、表面、一貫性といったものの認知を不安定にさせ、日常生活を理解するための確実な手段とされてきたカテゴリーを弱体化させます。特に建築に組み込まれた構造体では、不快とも言える状況へ大衆を惹きつける一方で、彫刻的な介入によりセンシュアリティと下劣さの境界を曖昧化しています。死と腐敗という概念に潜む実存的・政治的な問題を提起するこれらの作品は、しばしば現代の鏡の役割を果たし、世界における人類の立ち位置や、自然や環境との関係を映し出します。
主な展覧会歴に、「Baitogogo」パレ・ド・トーキョー（フランス、パリ、2013年）、「Transarquitetonica」サンパウロ大学現代美術館（ブラジル、サンパウロ、2014年）などが挙げられます。グループ展では、「Bruges Triennale」（ベルギー、2021年）、「Brasiliana - Installation from 1960 to the present」シルンクンストハレ（ドイツ、フランクフルト、2013年）、「Object in Flux」ボストン美術館（アメリカ、2015年）、第29回サンパウロ・ビエンナーレ（ブラジル、サンパウロ、2010年）。また、そうした展示活動のかたわら日本、フランス、ブラジル等で受賞歴を重ねています。彼の作品は、ヴァージニア美術館（アメリカ）、クイーンズランド州立美術館|近代美術館（オーストラリア、ブリスベン）、ポンピドゥー・センター（フランス、パリ）などに収蔵されています。Les Jardins Suspendus（フランス、ル・アーヴル）やショーモン・シュル・ロワール城（フランス、ロワール）、Arte Sella（イタリア）等におけるインスタレーション作品の常設展示も行っています。

関連プログラム

講演会 ティム・インゴルド氏
「観察の線、創造の線：可能世界における芸術作品」

photo: Joséphine Michel

18

気鋭の人類学者であり社会科学者としても知られるティム・インゴルドは、線という概念について興味深い視点を持っています。彼の著作のひとつ「Lines」によれば、線は世界にあらかじめ存在する実体ではなく、むしろプロセスであり活動そのものであるとの考えを示しています。線がどのように世界という織物の中に織り込まれ、物、人、アイデアをつないでいるかについて、インゴルド氏自身が研究の一端を語ります。
日時：10月12日（土）14:00〜15:30（開場13:30）
会場：金沢21世紀美術館シアター21 全席自由
料金：無料　定員：100名　予約：Peatix（6/10〜）
※日英同時通訳付

ティム・インゴルド
1948年英国バーグシャー州レディング生まれ。アバディーン大学社会人類学名誉教授。ラップランドのサーミ人とフィンランド人を対象にフィールドワークを行い、北半球の環境、技術、社会組織、人間社会における動物、人間の生態学と進化論について執筆。近年では、環境認識と熟練した実践について研究しています。インゴルドの現在の関心は、人類学、考古学、芸術、建築の接点に向けられています。英国アカデミーおよびエディンバラ王立協会フェロー。2022年には人類学への貢献により大英帝国勲章を授与されました。

「meet the artists（アーティストに会う）」アーティストによるギャラリートーク

展覧会「Lines- 意識を流れに合わせる」の出品作家6名が、作品の前で自作について語ります。制作のコンセプトやアイディアなど、制作者の生きた声で語られる貴重な時間です。
日時：6月22日（土）＊印は逐次通訳（日-英）
料金：無料　予約：Peatix（6/10〜）
Session 1: 11:00–11:30 大巻伸嗣
Session 2: 11:45–12:30 エンリケ・オリヴェイラ＊
Session 3: 14:00–14:45 ユーゲニア・ラスコポウロス＊
Session 4: 15:00–15:30 横山奈美
Session 5: 15:45–16:30 ヤコブ・フェンガー（SUPERFLEX）＊
Session 6: 17:00–18:30 ジュディ・ワトソン＋シェリル・レヴィ（朗読 / 詩人）＊

「鯖街道を辿って」

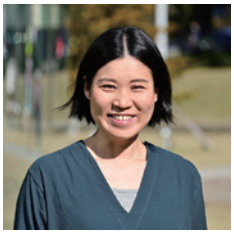
出品作家・八木夕菜によるアーティスト・トーク＋若狭と京を結ぶ鯖街道群についてのレクチャーとダイニング
日時：10月7日（月）＊詳細は8/1以降、WEBサイトをご確認ください。
八木夕菜（出品作家）、中東篤志（カリナリーディレクター／料理人）
川股寛享（小浜市文化観光課学芸員）
予約：Peatix（8/1〜）

19
八木夕菜《35.44267342604541, 135.90515799982285, 2022.3》/「Passes」より
2024

「Walk and Talk（散歩のすすめ） with curators」キュレーターと散歩をしながら話す会

「Lines- 意識を流れに合わせる」は、地球上のあらゆる有機体が紡ぎ出す糸の絡まりとその関係性の網目を考えてみようという展覧会です。美術館内で作品を紹介するだけでなく、自然の中にも「線」を発見する散歩をお薦めしています。
各回、黒澤浩美（金沢21世紀美術館チーフ・キュレーター）、野中祐美子（同キュレーター）いずれかがナビゲートを務め、美術館の敷地内を散歩するツアーです。
日時：7月13日（土）、7月27日（土）、9月14日（土）、9月28日（土）
　　いずれも9:45〜10:45
＊友の会会員のみ　8月10日（土）18:30〜19:30
＊サスティン会員のみ8月24日（土）8:45〜9:45
予約：一般…Peatix
　　サスティン会員…メール、電話
　　友の会会員…友の会WEBお申し込みフォーム
　　（いずれも6/10〜）

黒澤浩美　photo: Hiraku Ikeda


野中祐美子

「ミツバチ・このまち・私たち ～ハチってどんな生きもの？」

「Lines- 意識を流れに合わせる」の出品作家、Marguerite Humeauは、昆虫の集団行動に深い関心を寄せ、彫刻や映像作品に反映させています。彼女の作品にちなんで、蜂の生態について深く知るレクチャーと、美術館の敷地内に設置したニホンミツバチの巣箱の見学の会です。
※このプログラムは金沢21世紀美術館ボランティアメンバー「**みらいカフェ / BeesClub**」との協働企画です。
日時：9月7日（土）14:00〜15:30
講師：石川卓弥（石川県ふれあい昆虫館学芸員）
料金：無料　予約：Peatix（6/10〜）

広報用画像

画像1〜19を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、当館プレスルームの画像提供ページからお申し込みください。
https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

[使用条件]
※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。
※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。
※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報課へお送りください。
※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。